

VI

民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン2 平成23年6月29日



講師
山路清貴

VI

民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン 2

鈴木:本日のゲストは、山路商事株式会社の山路清貴さんです。

山路さんは、知る人ぞ知る言うか、横浜の都市デザインのさまざまな局面で活躍されてきた方で、AURという長島孝一さんを代表とする建築と都市デザイン、事務所からキャリアをスタートさせて、大岡川プロムナード等、様々なプロジェクトをご担当されました。現在も横浜市内でプロジェクトに関わっていらっしゃいます。今日は民間都市デザイナーから見て、横浜の都市デザインはどのように進化し、これからの展開はどうなるのか等についてお話をさせていただきたい、と考えております。

山路:よろしくお願ひします。頂いたお題が「民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン」、1回目は菅さんでその第二段です。私に関わった都市デザインの具体的な事例を振り返りながら、そこに含まれる脈絡を探ってみようと思います。私がやった仕事に脈絡があるのかと思いながら振り返ってみました。今回のための準備は自分にとっては結構楽しい作業でした。「ああ、こういう横浜市の全体の流れがある中で、こんなことやったんだ」と確認するような作業でした。

都市デザイナーによるスタンスの違い

菅さんのお話を伺って、菅さんがたどってきた都市デザインと私とは、だいぶ違いがあるのです。菅さんは首尾一貫した取り組みをしています。若い頃に考えておられたことを、そのまま一直線に貫かれている感じがします。私は、行政施策の潮流に身を任せ、どこに行くか分からないけれど、目の前にこういう仕事 came たらやってみようという取り組みでできた感じです。色々なことをしながら今に至った感じです。

その結果、都市デザイン室が行っているアーバンデザインからはだいぶ離れたところにたどり着いたという気もします。それがどこかと言うと、地域です。地域というものが最終寄港地であるか分かりませんが、自分には居心地が良く、自分が求められている

一つの港であると思っています。自分から行こうと思って行ったわけではなく、ある流れに身を任したら行ってしまった。そこには何らかの時代の流れがあったように思います。

菅さんは山手も含めて横浜都心部で実践され、いろんな範を得て、ほかに展開するやり方をしています。私は殆ど都心部に関わったことがなかった。始まりが「都心周辺」という、横浜では下町の地域から始まっています。そこから生活地域と言えるような場所での都市デザインの展開をしてくれているのです。

また菅さんは構造的に捉えることに長けているし、そういう捉え方が身に着いています。だから大きな都市デザインや、都市そのものを大きな構造として捉えて、各々のプロジェクト等の位置付けもはっきりあります。そこにプロジェクトの意義そのものも見出していると思います。

一方、私はスモール・アーバンデザインと言えるようなものを手掛けてきました。それだけ見ていると、なかなか全体が見えづらいのですけれども、都市をつくっているパーツとして、パッチワークの一つのピースを丹念に作りたい、という感じがあります。構造的に捉えないわけではないのですけれども、そういう都市デザインをやってきたな、という思いがあるわけですね。

それから、菅さんの場合には、そこで培ったことがどんどん他の都市まで展開していく、あるいは国際的にも展開していく、という開かれた意識を持っていたらいいけれども、私はどうも逆で、どんどん横浜へのローカライズが進んでいて、横浜の地域にどんどん傾注していて、あまり積極的に外に出ていこうとしない。面倒くさがり屋のところがあるのかもしれませんが、横浜で食っていけるのであれば、どんどん横浜だけでやっていきたい、というような意識がある。このような違いがあります。

アルバイトでアーバンデザイン

私は建築学科の出身で、同じ研究室の先輩に国吉さんがおります。でも国吉さんがいるから私が横浜に

いる、と言うと少し違います。大学に入った時にはもう国吉さんは卒業していました。大学にいた頃は、国吉さんの名前すら知らなかったですね。

国吉さんと私の間の年代に、栗生明さんという建築家があります。栗生さんは建築家として著名ですが、千葉大学の教授もなさっています。栗生さんが大学を出て勤められた事務所が榎事務所です。榎さんと横浜市は浅からめ縁があるようです。私は栗生さんから「榎事務所でバイトしない?」と言われ、学部の間から3年間ぐらいバイトをしていました。

榎事務所の中にはアーバンデザイン・チームがあり、後に私の事務所の所長となる長島孝一は、そのアーバンデザイン・チームのチーフをしていました。当時、榎事務所は日本橋の通町のビルにありましたが、アーバンデザイン・チームは高輪の「分室」と呼んでいた別室にいました。私はそこに配属されました。

それまでの学生時代は建築一筋でした。昭和45年(1970)に大阪万博を見に行つて、素朴に建築は面白いことができると思って建築学科に入りました。変わった建築でも設計できればいいかなと勉強していました。しかしバイトを始めたら、そこにはアーバンデザインというものがあったのです。

担当したメインのプロジェクトは中野本町の密集市街地の改善計画でした。細かい敷地や通りの隅切り、一方通行のシステムと歩行者空間の取り合わせ、街並みをどうするか等、まさにスモール・アーバンデザインの提案です。当時の榎事務所ではミニ・アーバンデザインと言っていました。このような計画の作業部隊に組み込まれて、なんだか右も左も分からない中でやっていました。

榎文彦氏(榎事務所)と横浜のかかわり

榎事務所は当時から横浜と縁のある仕事をしていました。金沢区総合庁舎、並木団地の基本計画などを手がけていました。榎事務所から独立した AUR コンサルタントも、その頃からの縁があったのが横浜の仕事を多く受けました。

榎事務所が横浜と付き合う背景には重要なポイントがあります。

田村明さんは、日本の都市デザインの始まりは昭和35年(1960)の世界デザイン会議であるというお話をよくされていました。世界デザイン会議の準備段階でのプロデューサーは浅田孝さんです。浅田さんが環境開発センターをつくったのが昭和36年(1961)です。まだ環境開発センターができる前に手掛けた仕事ですので、後に入った田村さんと一緒に取り組んではないだろうと思いますが、世界デザイン会議本番での浅田さんの担当は建築・都市・景観というテーマの部会で、浅田さんは事務局長でした。

この会議を背景としてメタポリズム・グループグループが生まれ、浅田さんはその発起人の一人でもあります。メタポリズム・グループの中に、丹下さんの門下生である黒川紀章さんなどがある中で、榎さんや大高さんもいました。このメンバーで特に横浜とつながるのは榎さんです。そういうことで、浅田さんの縁で、田村さんと榎さんがつながったと思います。

「わが家に勝る場所はない」

AUR コンサルタントは榎事務所から長島孝一さんと中村勉さん、長島さんの奥さんでドクシアデスの所にいたことのある長島キャサリンさん、この3人がつくれた事務所です。ちなみに彼女は「There is no place like home」すなわち「わが家に勝る場所はない」という言葉をよく使いました。この言葉はイギリス人が好きな言葉だそうです。「この home は家庭だけではなくて、わがまち、hometown という意味でも使っている。色々な地域から自分の街に戻ると『ああ、自分のまちに帰ってきたな』と感じるような場所がある」そこでつぶやくような言葉だと言っていました。「自分の地域には領域感がある。このようなことを横浜でも感じる。それが横浜の良さと思う」と彼女から言われたことを覚えています。その言葉は私の考えの基礎となりました。都市のデザインを考える時、「わがまち、わが家」という感覚をもって、まちづくり、地域づくり、を常に考えてきたつもりです。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

都市デザイン視点の都市部以外への展開

昭和53年(1978)に「歩行者空間整備に関する調査」を横浜市から受けました。各区役所とその最寄りの駅周辺地区と当時数カ所あった地区センター周辺地区を合わせて18カ所ぐらいのエリアを対象に、ともかく足で稼いで調べました。それらの駅や区役所から500mぐらいの範囲の歩行空間改善を提案するものでした。徹底的に横浜中を歩きましたので、この調査で横浜の空間的な感覚を身につけました。

もしかするとこれが、都市デザイン室が都心部以外に目を向けた最初の調査かもしれません。その2年後から3年かけて「区の魅力づくり基本調査」というのを都心周辺6区で始めました。我々の調査はプレ調査のようなものです【図1】。

昭和53年(1978)は飛鳥田市政が終わった年でもあります。飛鳥田さんが社会党の委員長になり横浜市をやめられた。田村さんも横浜市から離れることになりました。それまで都市デザイン室なり企画調整室には飛鳥田ブレイン的な意味があったと思いますが、新たな都市デザイン室の役割を見いだす模索が始まったともいえます。そして向かった一つのテーマが都心周辺部や郊外であり、都心部以外への方向性を探る、ということだったのではないのでしょうか。

区の魅力づくり基本調査は、下地としての次元として安全性と利便性を置き、独自性としての次元に「象徴性」「歴史性」「景観性」を位置づけ、これらを兼ね備えた地域を生み出すための提案でした。魅力づくり事業というのは、その地域に潜在化しているポテンシャルを見つけ出し、新しい魅力をつくるという事業です。事業の魅力化とは、既に始まっている各局の事業に対して、「魅力」という視点を注入していくことです。

当時は地域の環境についての基礎的な把握はほとんどできていませんでした。区役所に行っても地図一つ置いてない状況でした。ですので、私たちは都市計画局にあった2500分の1の地形図を5000分の1に縮小し、それを何枚もつないで区全体の大きな地図を作って、さらに5m等高線を読み取って、マーカー

でグラデーションに色を塗るという作業をしました。1枚の等高線図を完成するのに、なんと1カ月掛かったりしました。

調査の対象は、都心周辺の鶴見、神奈川、保土ヶ谷、南、港南、磯子の六つの区で、私の居た事務所はそのうちの4区分担当しました。

この6区は、昭和2年(1927)、横浜市に編入した場所です。概ね、市電が通っていた範囲です。市電が通っていた範囲は、戦前の段階でかなりスプロール状に市街化しています。このような旧市街地、下町地域をどうしようか考えるための調査でした。

具体化のモデルとなった大岡川プロムナード

この調査を契機に色々なプロジェクトに取り組み、具体的な事業につながりました。当時の都市デザイン室は事業費を持っていませんでした。計画費、それも実施設計費ではなくて、全体の基本の段階での計画費のみを負担していました。事業化が決まったら各事業の担当部局が引き継ぐという仕組みです。

「大岡川プロムナード」の設計は昭和55年(1980)から3年ぐらい掛けて取り組みました。昭和58年(1983)までに南区の区間が最初に竣工しました。

竣工した時に作ったパンフレットの表紙には、横浜市の地図が載っていて、「緑の軸線構想」という1960年代にあった構想も描いてあります。「大岡川プロムナード」で再び「緑の軸線構想」を持ち出して、その一端を大岡川プロムナードが担おうとしました【図2】。

南区は下町地域で、大岡川沿いには材木屋さんやサービス系の工場や事務所が多いところでした。和的な雰囲気でも文化もある。和も洋もあるような地域ですので、それを表す形は何だろうと悩んで、いきついたデザインが格子でした。ここでは、橋の手すりや照明に格子を採り入れました。格子のデザインはヨーロッパから入ってきたアールデコに見えるし、日本の障子のように和的なデザインにも見える。人によってどちらかに感じられたら、なんてことを考えてやっていたものですね【図3】。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

VI

民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン 2

今や桜が南区を象徴する存在に

その後、大岡川プロジェクトから、川と丘をつなぐようなプロムナードへと展開していきます。それが「丘と川ジョイントプロムナード」です。南区には7つの丘があるということで「虹のプロムナード」という名称で展開されました。平成2年(1990)からですが、90年代になると、川のプロムナードが区民のシンボリックな軸となりました。今や南区の人で大岡川プロムナードを知らない人はいないくらいです。そして「桜まつり」が平成3年(1991)頃から始まります。平成12年(2000)には「区の花」に桜が選ばれました。

しかし、プロムナードを歩く人が多くなり、桜の根っこが息できない状態になってきました。その桜を復元、蘇生、活用させるために「桜プロジェクト」が生まれ、桜並木を延命や補植する活動が行われています。どうしても切らざるをえない桜は、再生利用しています。

再生利用で、興味深い取組を一つ紹介しましょう。弘明寺の呉服屋さんがこの木のチップを用いて染色し、「大岡川の桜で作った着物」というものが作られています。他にも色々な活用を公募して「こういう活動をします」という方に桜を提供しています。また、南区には桜のマークの付いた自動販売機がたくさんあります。1個買うと10円が桜の基金に入る仕組みです。このような仕組みも作り、南区では皆でこのプロムナードを維持しようと取り組んでいるのです。

自分が手掛けた場所がこのように区民の皆さんに愛でただけ、私にとってこんな幸せなことはいわけです。桜というのは花が咲き誇るのはせいぜい1～2週間程です。残りの360日は、実は、嫌がられる木なのです。毛虫はいるし、枝が車にぶつかる等、苦情ばかりなのですが、たった一時の花のために存続が許される不思議な木です。地元の人のご苦労によって維持されている、このような光景を見るにつけ、幸せだと思わなければなりません。

提案から30年経って実現しそうなニツ池プロジェクト

区の魅力づくりは、その後、色々な展開を見せます。

私もいくつかに関わりました。

鶴見にニツ池という池があります。基本調査では、今から30年ぐらい前の事ですが、この池を活用すべきだという案を出しました。それが30年たって、村の入会地だった池を、今は複数人の共同所有地となっていますが、市が取得をして、具体的に公園化の計画が始まっています。

ニツ池を何とかしたいという市民がいて、鶴見区役所によってニツ池プロジェクトというのが組まれました。平成13年(2001)から16年(2004)の事です。今もそのニツ池プロジェクトは任意に活動されています。実際の姿を見るのはこれからですけれども、長いスパンを経てできるプロジェクトもあるのだ、ということですね。

区の魅力づくり的な視点は、市全域に波及していきます。

その一つが「郊外区のまちづくり」で、郊外全区で都市計画のコンサルタントが担当して、まちづくり計画を作っています。また「魅力ある道路づくり基礎調査」もあります。この頃には都市デザイン的の考え方を持った人、つまり都市デザイン室の友軍のような人がほかの部署に出始めていました。

この事業では最初の年に6区分を担当したのは榎事務所です。榎事務所が基礎調査をし、さらに第2期からは他の事務所が取り組みました。我々も当時の緑区(現在の青葉区と緑区と都筑区の一部)を担当しました。当時の緑区は「パッチワーク状の地区構成だなあ」という思いを強くしながら作業したことを覚えています。

この取組から、例えば中山駅から「四季の森公園」に行くプロムナードの構想が見出されましたが、道路の部分は土木事務所、水路の部分は下水道局が手掛けました。我々は親水化を目指した水路の部分の設計を担当しました。

橋のデザインに関わる

もう一つは、橋のデザインです。いくつかの橋のデザインに関わらせていただきました。

図4：和泉川親水広場
資料提供＝山路清貴



最初は「都橋」という野毛の町と吉田町を結んでいる橋です。かつての東海道から関内に至る主要な道筋に架かる橋です。入り海を渡って、野毛の山を越えて、関内に入る関門へと至る手前で渡る橋です。横浜としての歴史のある橋なのです。

そのデザインで一番に注目していただきたい眼目は親柱にあります。この親柱は震災復興橋です。関東大震災で多くの橋が落ちてしまった横浜では、3年間ぐらいに50橋以上が架け替えられました。つまり一気に50もの橋の設計がされたのです。その設計は東京藝術大学の先生に委嘱されて、どうもその時の学生設計課題になったようで、学生がデザインを描いた、と聞いています。

大正末期から昭和初期ですから、アールデコの時代です。ヨーロッパで流行ったデザインスタイルが用いられています。アールデコはジャポニズムからの影響を大きく受けたデザインスタイルです。そのような日本発のデザイン的な特徴や要素が、アールヌーボーの時代からアールデコにかけてヨーロッパに渡りました。そしてヨーロッパで盛んになったデザインを当時の日本の留学生が見て、日本の橋のデザインに用いたという面白い現象です。そういう震災復興橋が横浜都心部にはたくさんあるのです。

その復興橋の一つに共進橋という橋がありました。共進中学校のそばに架かっていたのですが、その後の架け替えで外された親柱が土木事務所に置かれているのを見つけ、もらい受けたのです。照明灯などの鉄部分は戦争で供出されて残っていませんでした。そこで我々は残されていた姿図を見ながら「こんな感じかな」とデザインをしたのです。

都市デザイン室は橋のデザインを手がかりにして展開した側面があると思います。

これは私の勝手な想像ですけれども、橋というのは違う領域を結ぶものです。全然違う領域を橋でつなぎ、かつ、橋そのものが一つのデザインとして意味を持っている。都市デザイン的な要素として、都市の構造上も重要な場所になる、という認識があつたのではないのでしょうか。

起債による財政的な裏付け

その後、「水と緑と歴史のプロムナード」事業が始まりました。当時の都市デザイン室は未だ殆ど事業費を持っていなかったはずですが、計画費が若干あるぐらい。それが「水と緑と歴史のプロムナード事業」という起債の仕組みによって、財政的な裏付けを持ちました。昭和60年(1985)のことです。

道路局は「魅力ある道路づくり事業」という名前で展開し、下水道局は「河川環境整備事業」や「小川アメニティ事業」、「せせらぎ緑道の整備事業」、緑政局は「緑のプロムナード事業」と様々な取組がなされました。

この事業を体系的に紹介した「水と緑と歴史のプロムナード事業」というパンフレットが作られました。そこには網羅的に色々なものが掲載されています。実際に事業をやっているのは他の部局ですが、デザイン室が働きかけてこのような制度を作り、他のセクションと取り組むことができる仕組みを作ったという感じがしています。

私共が下水道局から委託された仕事の一つに、和泉川親水広場があります。もともと蛇行して流れていた川が河川改修で直線状に施工されました。三日月状に残った土地は普通代替地などとして払い下げられるのですが、この部分は全部「川にしておもう」ということになりました。川の中の空間を広く確保し、その部分全体を広場にしましたのです【図4】。

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

図5:いたち川プロムナード

資料提供=山路清貴

図6:小いたち橋

資料提供=山路清貴



柏尾川プロムナードの橋

柏尾川にも関わりました。プロムナード本体は基本設計を担当したのですが、加えて大橋という旧東海道にかかる橋も設計させていただきました。昭和58年(1983)です。旧東海道とは言っても、この周辺には江戸の面影を残すものは殆どありませんでした。地元としては「旧道の面影を残したい」と言うのですが、幹線道路ですから木橋を架けるわけにもいきません。そこでH鋼を木組みのように扱うデザインを施しました。遠くから見ると、何か、「下にい、下にい」の大名行列が通っているように見えるシルエットを照明デザインで生み出す、という形にして、現代的なセンスと古めかしいセンス両方を感じられるデザインを試みました。

そんなことをやってもう25年も経った今、旧東海道の道づくり計画にかかわらせていただいています。コンサルタントではなく検討委員として参加しています。国吉さんも委員です。

国吉さんと一緒に仕事をしたのは、実はこれが初めてです。私が都市デザイン室の仕事を始めてから30年以上経ちましたが、おそらく国吉さんは、私が同じ研究室の後輩ということもあり、自分の仕事には直には呼ばずに、別なところで私を紹介してくださっていたと感じています。

橋も川の中も周囲も含めて広場

栄区を流れる「いたち川」に関わりました。大岡川と違って、川の中にも触れることができました。この川は三面張りの人工的な護岸に改修されていました。そこへ高水敷きや落差工等を設けて自然回復させ、多自然型あるいは近自然型と呼ばれる工法で再整備された日本全国でも有名な事例です。

この川の途中に、二つの川が合流する所があります。右岸に柏陽高校、左岸には栄区役所があります。ここに人道橋を架けて空間全体で広場にする計画を基本計画の中で提案し実現することになりました。橋を架けることによって、新しい回遊性を生み、区役

VI

所への新たなアプローチも生むものです。また川面に入れる階段護岸も新設し、そのような広がりも含めた広場を構想しました。この事業は、下水、道路、土木事務所、学校や教育委員会などが関わる事業であり、行政の縦割りの垣根を越えて空間の整備をしました。

本郷台駅からこの川沿いにかけて、いくつかの彫刻が展示されています。当時、「横浜ビエンナーレ」という市内各地をフィールドにする彫刻展があり、このプロムナードでも彫刻展の入賞作品を展示しました。これらの彫刻は、当初からプロムナードのどこに置けるか想定してもらい、入賞したものを実際に設置するものでした。

いつも暮らしの情景がある橋

人道橋そのものはイタチの親子がモチーフとなっています。彫刻家とコラボレーションして、この橋のコンセプトを考えました。新しい民話の種になるような、都市空間の中に生命観を入れられないか、と考えていました。「いたち川」だからイタチの親子という短絡的ですが、実はこの川は、「イタチ」がいたから「いたち川」ではありません。「いざ鎌倉へ出て立つ川」で「いでたち川」からが本来の由来です。

当時、世田谷区では「砧のためき」と言って、砧地域にタヌキのモチーフを入れ込んでいました。触発されたわけでもないのですが、イタチの頭をなでてもらえるような、子どもたちが「かわいらしい」と喜ぶデザインをしようと思いました【図5】。

「イタチの親子」がモチーフであるためか、ここへ行くくと小さい子どもがいつも遊んでいる姿が目につきます。暮らしている人たちにとっての情景の一部となる橋にしたい。いつも誰かがそこで時間を過ごしているような情景です。親子、老夫婦、友達・・・色々な人たちが時間を過ごす場所を生み出したかったのです。見ていて、ほほえましく、「ああ、いい時間だな」と思われるような場を目指しました。それはある程度実現しているように思います【図6】。

第2期の区の魅力づくり

区の魅力づくりは昭和62年(1978)の基本調査から5～6年後に「実施計画」を策定しました。それまでにできたこと、できてなかったことを振り返り、新しい視点の発見に努めました。原点に帰って場づくりを、空間づくりをきちんとしましょう、ということで「新規ものづくり事業」を組み立てました。そして「仕掛けづくり」「しくみづくり」「担い手(ひと)づくり」という骨組みで整理しました。「ひとづくり」は市民参加の促進、「しくみづくり」は市民に密着した行政システムを充実させていこう、という話です。

この考え方のモデルとして具体的に実践したのが南区南太田地区です。「南太田地区魅力ある街づくり調査」を昭和63年(1988)にやりました。ここでは「魅力要素」をみつけるべく、まちに出掛けて行き、例えば公園にいる人に「突撃インタビュー」。「この公園はどうですか」「どんなこと、やっています?」などと聞いてまわりました。1日歩き回って、一日の終わりにその日のまとめをしました。町内会、子ども会、老人会、保育園、小学校、Y校(横浜商業高校)でもインタビューをして、魅力づくりの芽を拡大させていきました。

そのインタビューから大岡川、蒔田公園、区役所、清水が丘公園等について、色々なことが構想されました。

その一つが「丘と川ジョイントプロムナード」へと展開しました。歩道もない狭い道の改善です。快適に歩き、大岡川と囲む丘陵地の環境を感じられる、一方通行のシステムを皆で考えました。

このワークショップを通じて、それまで一方通行化に反対していた方が、「この道には歩道がなくちやいかんよな」と言ってくださり実現したこともありました。このような形で、歩行者空間の魅力化が単なる通りや川沿いの道から、周辺地域へと広がるきっかけになりました。

ワークショップの手引き作成

平成3年(1991)に行った「身近な環境整備における市民参加方式検討調査」の中で、ワークショップの

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

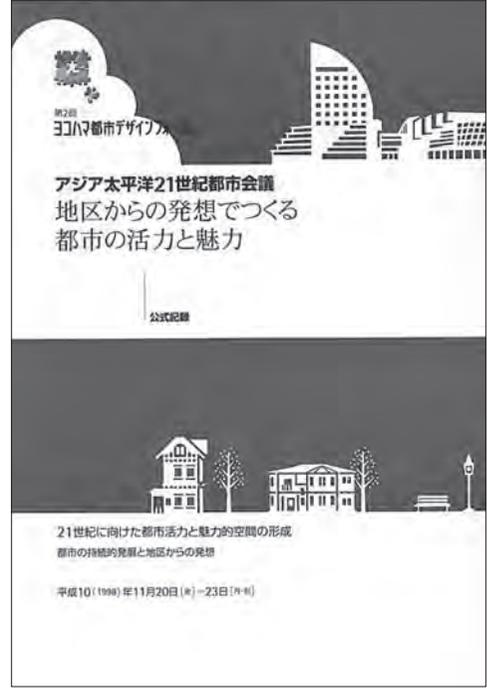
網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

図7：まちづくりノート(ヨコハマ都市デザインフォーラム)
資料提供=山路清貴



図9：第二回まちづくりフォーラム「100の提案」
資料提供=山路清貴



VI 民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン 2

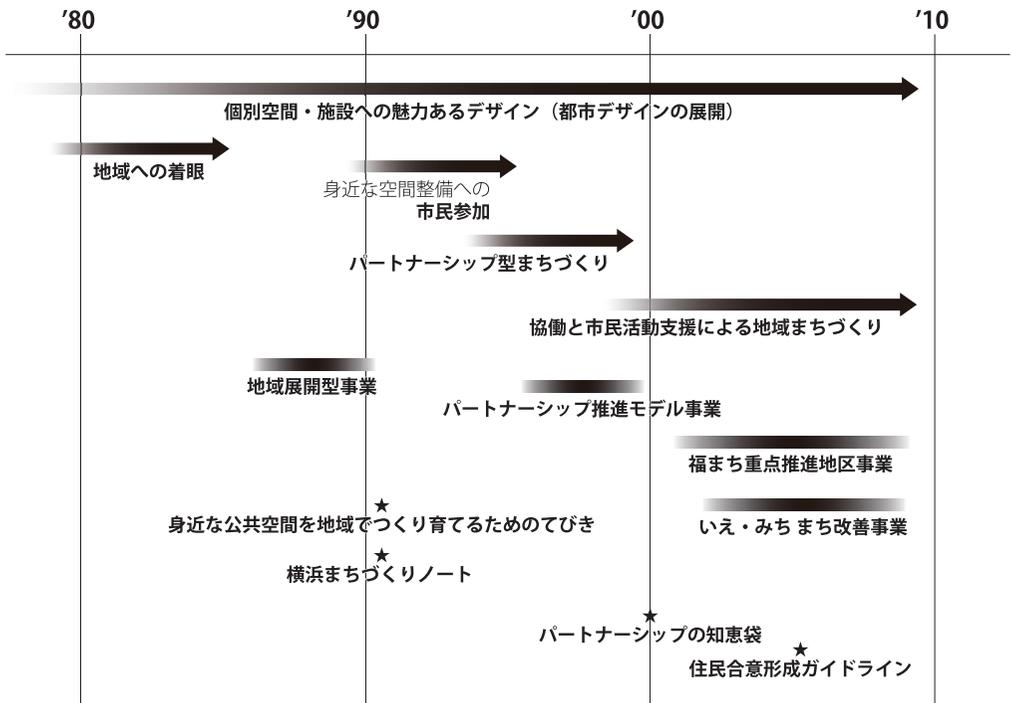


図8：地域まちづくり推進施策の系譜

手引きを作りました。当時はワークショップがさほど知られていない頃でした。そんな時代に、道路局、緑政局、都市計画局がプロジェクトを組み、ワークショップの進め方を暗中模索で作ったのです。

翌年に第1回都市デザインフォーラムが開かれ、市民型の取組が開かれました。長島キャサリンさんに国際会議用の冊子「まちづくりノート」を英語に訳してもらったのですが「まちづくり」という言葉が訳せなかったのです。日本語の「まちづくり」に合う適切な英語がない。英語に訳しちゃうと、towndevelopmentなど、開発系の言葉になってしまうのです。結局はmachizukuri(マチヅクリ)として、「まちづくりとは」の説明書きを加えました【図7】。

都市デザインフォーラムでは「市民とともに進める地域まちづくり」が謳われ、市民参加という言葉が横浜市の公式報告書で用いられましたが、横浜市としては初めての事だったかもしれません。それまでの市民参加型の活動は、ゲリラ的に施策の部分へと浸透していくものでしたが、これを機に公に認められる契機となったと言えます。

「パートナーシップ推進モデル事業」から「協働」へ

「区役所を窓口とした協働型まちづくり」としての事業で、私が最初に関わったのが「鶴見まちかど発見塾」です。「個性ある区づくり推進費」という予算制度が平成5年(1993)にでき、平成6年(1994)から3年間掛けて鶴見区が始めたのが「鶴見まちかど発見塾」です。

塾の中にはいくつかのテーマグループがありましたが、「鶴見のまちづくりと彫刻」グループでは、ビエンナーレの入選作品の設置場所を探すプロジェクトを開催しました。その他にも、鶴見の駅周辺で気持ちいい散歩道のガイドラインを創りあげたグループ、海への軸を構想するグループがありました。そうした活動を通じて、磨けば光る鶴見の魅力を「鶴見の原石」と呼んで集めてみました。そこから「歩こう鶴見わくわくマップ」の発行につながり、最終的には「つるみこのまち・このひと」というA4判の冊子へと展開しました。この冊子は、鶴見にいる色々な人を載せる人材と地

域活動の辞典のような本ですが、原稿から版下まで全て、公募の区民だけで作り上げました。

もう20年近く経ちますが、この頃の人たちとは未だに同窓会やっています。今では、この人たちが鶴見のまちづくりを支えています。例えば、新たに見どころをガイドする会を作った人や連合町内会長になった人もいます。地域を支える人づくりのルーツになったと思っています。

鶴見区のごこうした活動もきっかけの一つとなって、市民局と、都市計画局、企画局の3局で「パートナーシップ推進モデル事業」を始めました。「市民参加」という言葉が「パートナーシップ」という言葉に変わり、今では「コラボレーション」や「協働」という言葉に変わりましたが、市民と行政がスクラムを組んでまちづくりを進める仕組みが充実してきたのです【図8】。

協働のまちづくりをオーソライズ

2回目の都市デザインフォーラムが平成10年(1998)に開かれましたが、そのプログラムの中に3つの地域会議がありました。みなとみらい・横浜駅周辺・関内の都心部チームは「中心市街地の再生そして創造」をテーマとして検討して、「100の提案」という青い表紙が印象的な提案カード集を生み出しました【図9】。

私が参加したのは金沢区を舞台にした地域会議です。「地域の新たな文脈を培う」と題して、地域の人や、富岡並木調査隊「とんなんたい」、卯月さん率いる早稲田大学芸術学校の都市デザイン科、さらにはこの時にちょうど来日していたロンドン AA スクールの連中も引つ張り込みました。AA スクールの学生は市大に泊まり込んで、1週間プロジェクトをまとめました。みんなで街を歩き、提案を作り、発表するシンポジウムでした。地元の人たちは全長4~5m、幅が1.5mもある富岡・並木地区の模型を作って発表しました。その人たちは今も「らしく並木」というNPOの主たるメンバーとして活動を続けています。地域の暮らしは続きます。その継続性に誰が付き合っていくのが課題です。行政には継続性が担保されません。

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

3局トライアングルを組むことで、色々な地域づくりが進んでいました。そうした仕組みを都市デザイン会議で全市的にオーソライズするといった感じでした。

寺尾地区で福祉のまちづくり

鶴見の寺尾地区では「福祉のまちづくり条例」の重点推進地区になり、福祉をテーマにまちづくりを行っています。

例えば、バス停を改善するスモールアーバンデザインのような取組をしました。狭い歩道の真ん中にバス停標識が立っており、その部分では一旦車道に降りないと通行できない状態でした。そこでバス停に隣接する学校にお願いして敷地を提供していただき、バス停を小さな広場に変えるデザインを実現しました。「シルバー・カーペンターズ」というボランティアグループをお願いをして、材料だけ支給してベンチを作ってもらいました。

後に気が付きましたが、福祉の世界の方々は、このようなハードな設計を行うことは苦手です。福祉だけでは電柱一本、段差一つ動かすことは至難です。福祉と土木事務所をつなぐ必要があるのです。つまり異なる専門分野がつながることで、一つの空間が完成するのです。異分野を調整する力は、都市デザイン出身者である賜だと思っています。

入り口は別でも出口は一緒

近年、横浜市では市民主体の地域運営と言っている「エアリアマネジメント」の考え方が広がっています。この背景を遡ると「個別空間・施設への魅力ある都市デザイン」という視点に辿り着きます。まず地域への着眼があり、そこから「身近な空間整備への市民参加」、「パートナーシップ型のまちづくり」、さらに「協働と市民活動支援による地域まちづくり」という展開がなされました。つまり「エアリアマネジメント」のルーツは都市デザイン室にあると思います。

私はいろんな地区とお付き合いしていますが、地域まちづくり活動の始まりとなるテーマは色々です。

しかし実際に地域に入って、1年ぐらい経ってまちづくりの方向性が見えてくると、どれも出口は一緒ということがわかります。地域のテーマは「安全・安心」と「魅力的な暮らし」が共通テーマです。福祉、防災、防犯、景観、環境、緑、等どこから入っても全部同じ出口なのです。例えば「地域の歴史は地域住民みんなが共有するもの。多世代交流にも欠かせない。また、自然は癒しの空間を提供してくれる。だから歴史だって自然だって福祉なんだ」と。これが地域の感覚なのです。

出口は一緒だから、どこから入ってもいい。暮らしの中に縦割りの線引きはありません。24時間、365日その地域での暮らしが全てなのです。

都市デザイン室は縦割りの線に横串を刺そうと取り組んでいました。縦の線を越えることで、初めて地域の暮らしが豊かになる。これは私がデザイン室と付き合って意識させられたことです。デザイン室に鍛えられた民間のアーバンデザイナーとして、そうした都市デザイン的なマインドをずっと踏襲しているつもりです。

景観法で終わらせず、景観ビジョン作成

その後、景観法ができ、都市デザイン室が担当となりますが、単に法に規定された枠内に留まらず、「景観ビジョン」を策定することになりました。鈴木先生、国吉さん、北沢さんといった方々と、公募の市民に参加していただき「横浜の景観とは何か」を、すったもんだしました。そして「横浜の景観づくりに向けての16の着眼」をまとめました。その着眼に基づいて、景観から見たきめ細かい地域類型、地域に合う景観づくりを想起しました。

さらに、住民自らやれることを一つずつやっていく、ということでできそうな内容を『ひとりでもできる、良好な景観の素地をつくる作法集』をつくりました。例えば、人の気配を感じるまちをつくらうという項目では、道に面して窓を作りましょう、といったことが書いてあります。北側の道に面する方へも、ちよつと小窓があつてのぞけるとか、道に面してちよつとした作業スペースなどの人の場づくりを促すといったことです。

これらがまちの安全にもつながり、活気にもつながると考えました。

ワークショップ型の職員研修

ワークショップ型でまちづくりを提案する職員研修を平成2年(1990)に実施しました。都市デザイン室総出で、私も参加させていただき、やりました。チームを組んで4日間である地域に向いてまちづくり提案を作成し、5日目の午前中はプロジェクト課長会仕立ての発表会、最終の午後は地域の方を招いての発表会とハードなものでした。

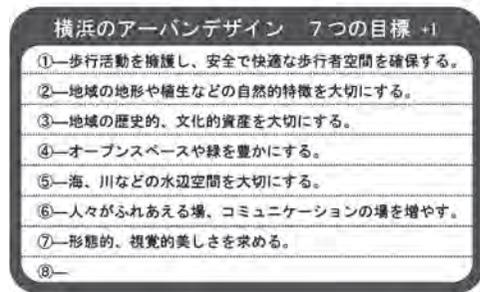
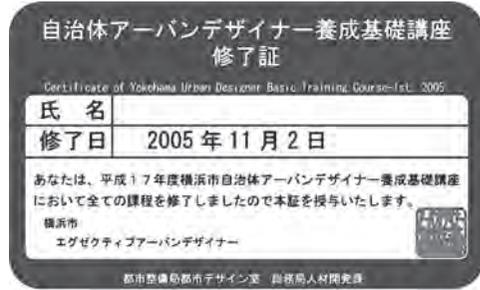
最近では「自治体アーバンデザイナー養成基礎講座」を平成17年(2005)から平成20年(2008)まで開催しました。卒業すると「自治体アーバンデザイナー養成基礎講座修了証」が貰えます。裏側に「横浜のアーバンデザイン7つの目標」というのが書かれていて「8つ目は自分で書け」というところが『ミソ』です【図10】。有料で、しかも何の資格にもならないのですが、中々盛況で、延べの受講者は100人を超えたと思います。都市づくりには何にも増して人材が大切だと意識してきましたし、これからは益々そうした時代になると考えています。というところで私の話は終わりにします。どうもありがとうございました。

アーバンデザインがルーツ

鈴木：さまざまな局面で、山路さんは都市デザインの活動を下支えされてきました。この「都市デザイン連続講義」の講師をなぜ、菅さんと山路さんに依頼したかということ、対極の位置づけであるからです。今日のお話で、山路さんは新しいフィールドを開拓し、フロンティアを切り開いてお仕事をされてきたということがよく分かりました。

地域に出ると、福祉もアーバンデザインも一つの空間にあり、生活の中では統合されているものです。問題はどんな地域もほぼ同じです。行政は縦割り傾向があり、一方で地域に入って活動をする、全て総合的に解かなければ解決できません。私も黄金町等

図10:自治体アーバンデザイナー養成基礎講座修了証
資料提供=山路清貴



土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

VI

で市民参加に関わって感じることです。

山路：実は私は「縦割り論者」でもあります。組織は、そうしないと責任を取らない。みんなでやりましょう、みたいなことになると、みんなの間に挟まって大切なことがもれてしまう。だから、逆に縦割りにして「あなたはこの責任をしっかりと果たしてね」ということの方が効率的で、成果が貯まっていくと思うのです。しかし、それで全部解けるかは難しいです。行政的仕組みや上意下達のしっかりした仕組みは縦割りが一定の成果を上げますが、生活地域は横つなりの環境なのです。ここでは、町内会長さんが偉いわけでもなく、みんな横にフラットにつながっている。だから、生活課題は、実は色々なものが同時混在化している。道路を造るにしても、例えば道路局が交通を解いてつくった道路が使いやすいわけでもないのです。その時に、道路に対して「これは商業的な空間だから、商業活性化のために役立ててくださいよ」という人もいるかもしれない。風の道や環境創出として重要だ、という人がいるかもしれない。防災的な空間として重要だとか色々な人が出てくるでしょう。街路樹を植えて、もつと自然のための空間にも、とか、色々な視点があつていいわけですね。

それを、縦割りの仕組みの中でやろうとすると、なかなか解けないわけです。ですが地域はそれを求めるわけです。地域の時代とは、つまり、横つなりに小さな色々な視点をつないでいく時代なのです。横つなりの小さなまちづくりが、これからは主流になっていくと思います。

自分の縦割りを持たない組織

そうした時に横つなりを実現する方法として、私は都市デザインだと思ったのです。つまり、都市デザインの役割の一つは、縦割りの行政機構の中にあつて、横断的に色々なところに動いて、そこで人を見つけてきて、そこで仕事をつくって、やっていくことだと思うのです。都市デザイン室そのものが行政の中の横つなりをつくり、その横つなりを地域の中で実践する。これが都市デザイン的な事業の進め方だと

思うわけです。

今、都市デザイン室が果たすべき横つなりの役割が少し薄れているような気がします。それはプロパーの仕事が増えたことも一因です。景観法、歴史的建造物の認定、看板類のコントロールなど、デザイン室として縦割りの一部を担う仕事が増えています。

では、誰が横つなりをやるのかと言うと、都市デザイン・マインドをもったコーディネーターなどの人材がやるしかないと思うのです。新たに横つなりをつくる動きが生まれてくるのを私は楽しみにしています。そういうことが新しい都市デザインの一つのアプローチになるといいな、などと思ったりしています。

野原：私が平成15年(2003)に東京大学に戻った折、「都市デザインの誕生譚」という研究を行う中で、都市デザイン創生期に活躍されていた方々にヒヤリングをしましたが、中でも、私は槇先生を訪ねる会に同行しました。

その際に、槇先生が「都市デザインというのは、プロフェッションじゃなくてポイント・オブ・ビューだからね」と言われました。つまり都市デザインは、ものの方によるものであつて、プロフェッションではない、ということなのです。一方で北沢先生などは、都市デザインが一つのプロフェッションであり、テクニクであり、それを持つ人が都市デザイナーとして活動できるという考え方で取り組んでいたと思います。山路さんにとって、都市デザインと呼ばれるものは、一つのものの見方なのか、プロフェッションなのでしょうか？

もう一つは都市デザイン室という一部局と通じて、様々な展開をされた人がたくさんいる横浜は、民間の都市デザイナーである山路さんには、どのように見えるのか。メリットなのか、違うあり方もあるのではないかと、ということをお伺いしたいと思います。

都市デザイナーを増やしたい

山路：都市デザインはその場その場ですよ。だから、自分が地域で仕事をする上では、プロフェッションと

して地域の人と一緒にあって、その考え方を共有し、まちづくりを進めます。そこでは専門的なものの見方を地域の人に言うてもしょうがない。それは自分の中にあればいい話で、説明するようなものではないでしょう。だから自分の中にも、各々の立場で都市デザインの勉強したことをスキルとして、プロフェッションとして使っているな、という思いと、逆にムーブメントとして、ものの考え方として使っているな、と思う時と、両側面があります。

都市デザイナーを増やしたい、と思っています。現在、都市デザイナーは多くない。都市デザインで食えている人は、ほとんどいないと思います。私は大学で都市デザインを教えているけれど、都市デザイナーだけの肩書きの人は、日本にも世界にもいないかもしれません。ですから榎さんが言うように、プロフェッションではないのかもしれませんが。

けれど、都市デザイン的なマインドを持った人たちが、都市と関わって色々な場面で生きていく、生きていける、ことが大切だと思っています。都市デザインはどういう考え方をもって、どういうことをやるんだ、ときちんと言え人がたくさん増えてほしいのです。だからそのためにも、色々なところで教えたりしています。

会場に都市デザイナー養成講座の教え子がいるので、そのあたりのことをちょっと聞きたいのだけれど。

受講生1: 第1回の都市デザイナー養成講座に参加させていただきました。体系的に都市、まちづくりを勉強する機会は、学生の時にもありませんでした。この講座を経てから、自分の中では都市というものがつながり、出来上がったものを見る目も、与えられた仕事に対して、イメージをつくるスキルが向上したように思っております。

山路: こういう人をたくさん増やしたいのですね、色々な場面を通じて。市民の中にも出てきてほしいのです。私が地域と付き合いたいのは、このようなこだわりもあるのです。

横浜は私にとって実はあこがれの地なのです。私

の生まれは千葉県の木更津で、対岸の灯(ひ)として横浜を見て育った人間です。小さい頃は客船の航路もあって「きょうは中華料理だ」とその船に乗って、大栈橋の脇に着いて、中華街で中華料理を食べた経験があります。そんな横浜は素晴らしい、憧れの街だったのですよ。

私には横浜でやらなければいけないことが、まだまだたくさんある。これからの横浜には、もつともつとやらなくてはならないたくさんの課題を抱えているまちだと思っています。もつと掘り下げたい、というこだわりもあります。

地域の目標をしっかりと示す

鈴木: 民間のプランナーはいろんな業務を重ねて、いわゆるアーバンデザイン的な仕事は、ある程度のレベルへ確実に上がってきているように思うのですが、一方でその先に何を見るか。例えば、行政の縦割りを超えて、新しい行政の中の仕組みを考える、ということです。ここの部分は、ほかの自治体と付き合っても、難しいのですよね。ですけれども、そういうことを考えながら仕掛けていく、という部署があるのは、ほかの自治体と異なるところではないかな、と思うのです。

山路: 「区役所機能強化」の歴史を調べてみますと、昭和44年時点で既に「一カ所所で用を足す区役所づくり」と言っていましたが、36年経った平成17年(2005)にも「ワンストップで処理できる区役所」と言っています。中身は違うのでしょうか。時代を経て、区役所は横つながりで地域と付き合うという考え方が強まりました。かつては、区役所側は区政推進企画調整係が都市デザイン室のパートナーでした。しかし双方ともに人が足りない、金はない、仕事はどんどん生まれる、という中で動いていました。

その後は、どうも理念が先行しているような気がします。もう一回、横につないでいく意識とはこういうことなんだよ、ということ都市デザイン室自ら言うてほしいのです。

私は3局トライアングルの時代にできあがりつつ

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

あつたような、企画や政策を担当する部局とハードな部局とソフトな部局による関係性の形は崩してはいけない気がします。

その中で、横つながりの意識を持てる代表選手はどこにいるのかと言うと、今は少し見えづらくなってきているのではないのでしょうか。

鈴木：やはりコーディネート、プロデュース能力のある人材が行政の中でも求められている、ということなのかかもしれません。

受講生2：民間のデザイナーという立場から、縦割りが問題だ、ということですが、個々の事業の中で、ミクロ的な領域で、ここが民間の都市デザイナーとして、行政または市民に対してちよつと不満、ということがあれば、教えていただきたいな、と思います。

「我々が考えないことを持ってこい」

山路：私は縦割りが問題だ、と言っているのではなくて、縦割りがありながらの横つながりを作れないとまずいよ、と言っているのですね。縦割りなしで横つながりだけつくっても、全然駄目なのです。それぞれの主体だけではできないことを、お互いに請け負っている、という感覚が大切だと申し上げています。

これも都市デザイン室から教わったことです。岩崎駿介さんと仕事をしていた頃、「我々が考えそうなことは持つてくるな。それは我々が考える。我々が考えつかないようなことを持ってこい。」と言われました。そうした意識をもって、まず、行政の人も市民も、そのプロジェクト、そのまちを何とかしようとする一片のかけらとして、自分の中にある専門性を発揮します。それでも欠けてしまうものがあるので、それをアーバンデザイナーは埋めなさいよ、というわけです。それは何だろうか、ということを考えてみました。

ですから、ここは手が忙しいからその手だけをやってね、と言われても請け負わない。ということなので、個々の仕事を通じての不満はないのですよ。それぞれの専門性を発揮しながら、切磋琢磨して一つ

のものに創りあげていく、ということです。横浜市には、そういう意識で一生懸命やってくれる人は山といえます。市民の中にも山といえます。

色々な意識を持った人がいるのが社会です。色々な人がいるということは、むしろ面白いことです。そこを自分はどう泳ぐか、と考えるのです。ですから、何かあまり不満を持ってやっけては、良い方向に行かないと思います。

鈴木：むしろ、こうすればいいのではないかと仕掛けていく意識の方が横浜のプランナーの方は強いように思います。それぞれの手法があつて、他の部署も巻き込んで、こういうふうにさせよう、といういろいろテクニックを持っておられるな、と思います。

私も、この縦割り論はなくならないと思っています。大正8年(1919)に旧都市計画法ができ、日本で初めて都市計画を仕事にする人が生まれるのです。その時、内閣官房に都市計画課ができ、その第一技術係が土木、第二技術係が建築、第三技術係が造園です。当初から、建築・土木・造園の縦割りの問題は指摘されていて、今もつて縦割りが指摘される。要は、永遠に縦割りはなくならない、と思っているのです。

そういう弊害を乗り越えよう、何か新しいことをやり始めると、最初はいいのですけれど、しばらくすると、それが自己目的化する。ある目標をもってやっていたのが、そのことをやるのが目的化する。行政でも民間の企業でも必ず、何かをやっていると、やがて自己目的化する、という現象が起こる。それはコーポレート・ガバナンスの世界だと、アクティビティ・トラップと言うそうなのですけれども、そういう現象は常に起こっていくので、絶対、行政の中でも縦割りはなくならないと思うのです。

それを横つなぎして、そこから新しい政策を生み出すところが重要です。そういう活動が常に起こって、自己革新を起こしていかないと、都市づくりは時代の課題に対応できていかないと、思います。山路さんの「縦割りというのは、必要であり、なくならないものだ」というところに私の同感です。

そういう目から見ると、都市デザインというのはこ

ういう役割を担っているのだ、というお話はありますでしょうか。

縦割りに横串を刺すような人

山路：縦割りは必要だと申し上げましたが、都市デザイン室には縦割りになってほしくないのです。デザイン室の役割は違うでしょう。都市デザイナーは増えないかもかもしれませんけれど、まちづくりコーディネーターは増えていかなければなりません。

今度の震災を見ても、一番足りないのはコーディネーターですよ。色々な地域や場所で横つなぎできる人が不足していた。避難所だってそうだし、後方支援との間もそうだし、全てのところでそこが不足している。では誰がコーディネート能力を発揮できるのかと言うと、コーディネーター養成講座をやったり、コーディネーター学科ができてでもできればokとはいえません。非常に実践的な調整の場面をくぐり抜けないとできないわけですね。活躍できているNGOなどでは、調整しつつ、一歩引ける人間が本物のコーディネーターとしてやっていますよね。

では、都市デザインの世界ではどうなんだ、と言うと、縦割りだけではコーディネートにならないので、横浜市から出てくるとすると、やはり都市デザイン室でしょうか。福祉の世界からも生まれてくるかもしれないけれど、縦割りの福祉をやっているのでは駄目ですよ。地域福祉などの世界で横串を刺していくような人です。

もつと言えば、私は縦割りの組織は「無縁型」の組織だと思っています。縁で動かない組織。そうした組織は上意下達の命令の中では一生懸命に動きます。一方、地域は有縁の組織と言いますか、有縁のコミュニティです。縁が切れたら地域はバラバラになる。

地域が有縁社会を強化していくためには、横つなごりの意識が重要です。義理と人情を言っているのではなくて、人と人の縁をうまく紡ぐ人たち、そうしたコーディネート能力を持った人たちをどこが生むか。その一つは、都市デザインという領域ではないか、というのが私の今の思いなのです。

それが今の都市デザインの役割になっているかと言うと、そうはなっていないので、私としては、そこで教えてもらったことを他の領域でも精一杯やりましょう、という感じです。全く非力なので、もうちょっと仲間がほしいですけど。

一番新しい課題は地域で起こる

私たちは、地域が最前線だと思っています。「一番新しい課題の多くは地域で起こっている」と仲間から良く言われます。地域での課題に対応できなければ、これからの都市問題の解決にならない、という感覚を私も持っています。

鈴木：考えると、山路さんみたいな人が、やっぱり100人単位でないと、横浜市でカバーできないですよ。

山路：アーバンデザイナー養成講座の卒業生が折角100人もいるのだから、その100人が「何かしてくれないだろうか?」という思いが私にはあります。

鈴木：そうですね。アーバンデザイン基礎講座を卒業した人が、一斉に地域に出掛けて行ったら、相当世の中変わるのではないかと…。

山路：何ができるか分からないですけどね。でも、そういう手もあるのかな、と思います。行政の中からのムーブメントとしてもあつていいのではないかと。行政の中にいながら、行政の縦割りではない意識を持っている人が、特に区役所で業務していないといけない、という気持ちです。

鈴木：実際問題、山路さんのおっしゃる有縁な社会、コミュニティというのは、日々刻々変わっていて、高齢化や福祉の問題とか、危機的な状況にあることは確かです。そういう状況に対して、横断的に振る舞える人材がこれからさらに必要になる、ということです。本日は貴重なお話をありがとうございました。

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好